

「鳥取地学会化石部」は起爆剤となるか？

—博物館と地元団体の連携と活性化を模索する—

鳥取県立博物館 自然担当学芸員（地学） 田邊佳紀

1. はじめに

鳥取県立博物館（以下、当館）は「収蔵庫の満杯状態」が深刻化している。また、鳥取県を活動拠点とする学術団体「鳥取地学会」は「人員不足とそれに伴う存続問題」を抱えている。そこで発表者は2020年度（令和2年度）から鳥取地学会内に「化石部」を発足させ、当館収蔵庫の化石整理や普及活動の補助などを定例の活動とし、鳥取地学会が積極的に当館の事業に連携できる仕組みを整えた。これにより、鳥取地学会の活動が活発化し、かつ当館との連携が強化され、やがては鳥取県の地学が盛り上がるための起爆剤になるのではないかと考えたからである。発足後2年が経とうとし、標本整理を実施し標本目録を作成することができ、化石に興味関心を持った方々の入会により会員数が増加するなどの成果が上がる一方、新たな課題も生じ始めた。本発表では、博物館と地元学術団体の連携事例を報告する。

2. 「鳥取地学会化石部」とは？

鳥取地学会（後述）内に発足した組織で、2020年度（令和2年度）から活動を行っている。メンバーは会員の有志からなり、ジュニア会員（高校生以下の会員）およびその家族（一般会員）が中心で、37名（2021年12月現在）が参加している。

- 目的：化石を楽しむ*
- 目標：「鳥取県化石図鑑（仮称）」の作成*
- 主な活動内容：①当館所蔵の県内産化石標本の整理・調査
②野外活動（化石産地の確認や化石採集等）
③その他、県内産の化石に関連した活動
- 頻度：月2回程度
- 場所：当館および県内化石産地
- その他：野外活動保険は加入済み、連絡体制はSNSを利用

*: これらは化石部としての表立ったもので、本来の「目的」「目標」は次項で述べる。

3. 「化石部」 発足の経緯

化石部発足のきっかけは、当館と鳥取地学会が抱える課題が関係している。

1) 鳥取県立博物館の課題

① 収蔵庫の「満杯状態」

当館の地学収蔵庫は、収蔵庫の使用状況が「9割以上（ほぼ満杯の状態）」または「収蔵庫に入りきらぬ資料がある」である「満杯状態」（公益財団法人博物館協会，2020）が深刻化している。当館の前身である「鳥取県立公民館 科学研究館」（1947年に鳥取県立図書館内に併置）から70年以上に及ぶ地学標本の蓄積がある。しかし、増え続ける標本に対し収蔵スペースは限られており、止む無くコンテナの床置きや（図1A）、屋外倉庫（図1B）および館外倉庫（図1C）での保管を余儀なくされていた。



図1 鳥取県立博物館の収蔵庫の様子。
A：館内地学収蔵庫，B：屋外倉庫，C：館外倉庫（鳥取県立緑風高校の倉庫）

② 「化石」への関心の高まり

発表者は2018年（平成30年度）7月14日～8月26日まで当館企画展「とっとりの化石EXPO 2018」（図2）を担当した。鳥取県を中心に隣県から産出する化石を展示・解説した企画展である。この展示以降、「化石採集をしたくなった」「どこで発掘ができますか？」などというアンケートや問い合わせ（電話や直接など）が増え、鳥取県内から産出する化石への興味関心が得られたことを実感した。しかし、化石採集会は山奥や水際、崖下などで行うことがあるため危険が伴う。また、地権者への配慮の徹底と化石採集許可をお願いする必要がある。さらに、鳥取県内には化石が多産し、かつ安全性や利便性の良い化石産地が少ない。そのため、化石採集会の実施



図2 平成30年度 鳥取県立博物館企画展「とっとりの化石EXPO 2018」のチラシ。
左：表面，右：裏面。

は容易ではなく、当館が行う化石採集会はせいぜい年に1回程度であり、利用者が持った化石への興味関心を逃してしまう場面に何度も直面した。鳥取県内において、当館以外を含めても化石採集会の機会はほとんどない。化石採集、または地学的な野外観察会に係る知識を有したより多くの人員を必要としていた。

2) 鳥取地学会の課題

鳥取地学会は「鳥取県における、地球科学分野の振興・普及、研究の推進、および地学教育の向上、ならびに会員相互の情報交換を図ることを目的」とした鳥取県を活動拠点とする学術団体で、当館に事務局があり、発表者がその担当を務めている。会員総数は108名（2021年12月現在）であり、一般会員はもちろん、学校教員、大学教員、博物館関係者、地質系業者職員、コレクターなどの会員で構成されている。

1996年（平成8年）に発足後25年が経ち、会員の高齢化が顕著となっており（星見2018）、それに伴う事業縮小傾向は否めない。また、「地学教育」の視点からの鳥取地学会の在り方が議論されるなど（星見2018；山口2019）、地元の学術団体が地元に貢献できることとは何なのか、その見直しが進められようとしている。

3) 課題解決のために —鳥取県立博物館と鳥取地学会の連携—

当館と鳥取地学会、それぞれが抱える課題はお互いが協力することで解決する。そこで発表者は「鳥取地学会との連携」が最善であると考えた。当館が行っている利用者との連携は「友の会」と「ボランティア」、そして「鳥取県立博物館県民協力等実施の対象団体（以下、県民協力団体）」が存在する。「友の会」は学芸業務の補助などは行っておらず、また「ボランティア」の新規設立・運営には労力と時間が必要となる。

一方で、「県民協力団体」は「当館が、鳥取県の学術文化振興や社会教育の充実（以下、学術文化振興等）への貢献が期待される県民の同好会、グループ、サークルその他の団体に対して協力等（日常的・継続的な協力、連携、支援等をいう。以下同じ。）を行い、又は当該団体の協力等を受け入れることについて必要な事項を定め、もって県民との協働により学術文化振興等を推進する体制を構築することを目的」としており、鳥取地学会もこの団体に指定されている。しかし実際の連携は、地学講座を単発的に共催する程度で、継続した連携事業は行うことができていなかった。両者の継続的な協力関係を構築し、収蔵庫の整理や化石採集会を共に運営していけば、両者の課題解決にもっとも効果的であると考えたのである。

4. 「化石部」の発足と活動開始

上述の経緯を経て、発表者は鳥取地学会内に「化石部」と称した組織を発足させ、会員の有志を募り7名が集まった。さらに、18名が会員からの紹介で新規に鳥取地学会に入会、化石

部への入部があった。化石部は2020年4月18日にこの25名で活動を開始した。化石部の概要は「2. 「鳥取地学会化石部」とは？」で述べた通りである。

1) コロナ禍と「化石部準備中」

しかし、同時期に新型コロナウイルスの感染が拡大し、その予防措置として、4月7日、主要7都府県に「緊急事態宣言」が出され、その後、感染拡大に伴い鳥取県においても4月13日から県内の公的機関が閉鎖される事態となった。そのため、当館も5月6日まで閉館、行事が5月31日まで中止となった。これに伴い、この間は化石部の活動も中止とした。

コロナ禍で化石部活動開始の見通しが立たない中、化石部で行う活動をわかりやすくお知らせする「化石部準備中」というタイトルのレターを作成・配信した。主な内容は県内の化石産地や化石のでき方、発掘のマナーや標本の扱い方などを紹介するとともに、質問コーナーも設けたものである。メンバーからの高評価もあり、コロナ禍の影響が小さくなりつつある現在も配信は続けている。

2) 活動開始

コロナ禍の影響を受けながら、実際の活動開始は同年6月からとなった。活動は月に2回程度で、当館収蔵庫の標本整理(図3)と化石(ときには鉱物)採集会(図4)を交互に行っており、2020年度(2020年6月～2021年3月)は標本整理が延べ150名(全12回)、採集会は延べ85名(全6回)の参加があった。2021年度の実績は現在集計中である。



図3 化石標本整理(オリエンテーション・作業)の様子。

A: 鳥取県立博物館1階常設展示室見学(宮下魚類化石群コーナー), B: 全体の様子(場所: 2階会議室), C: 整理の様子(同場所)。撮影日: 2020年6月14日(A), 同年7月4日(B, C)。

3) 活動成果

化石部の活動の中で、特筆すべき主な成果は次の2点である。

①当館収蔵標本目録の作成

2020年度は、「辰巳峠産大型植物化石」の整理を行った。当館は鳥取市佐治町辰巳峠から産出した大型植物化石(肉眼で観察可能な植物化石)を多数所蔵しており、中には新種を記載する際の基準となる「模式標本(タイプ標本)」も含まれている。これらの所蔵場所を棚単位で明らかにし、ラベルと標本が離散しないよう整理し再梱包を行った。作業は、発表者や有識者の監督のもと細心の注意を払い行い、標本情報はリストアップし、これをもとに標



図4 鳥取県鳥取市での野外活動の様子。
A-B：全体の様子，C：鉱物採集の一場面，D：産出した貝類化石。2021年2月14日撮影。

本目録を作成した（田邊・清水 印刷中）。やがては目標として掲げる「鳥取県化石図鑑（仮称）」（辰巳峠編）の作成にも向かいたいと考えている。

②鳥取地学会会員数の増加

化石部発足前は鳥取地学会の会員数は101名（一般：90名、法人：4団体、学生：4名、家族：2名、ジュニア：1名、2020年3月時点）であった。しかし、化石部発足後、現在は108名（一般：83名、法人：4団体、学生：3名、家族：4名、ジュニア：14名、2021年12月現在）である。退会者もあるので総数は大きく変わらないが、化石部による会員数の増加は2021年12月現在で28名（一般：11名、家族：3名、ジュニア：14名）となった。

5. 「化石部」が抱える課題

1) 運営体制

化石部の運営はメンバー諸氏を主体とするのが理想であったが、実際には発表者が主たる運営を行っている。これは発表者が、①鳥取県立博物館職員である、②鳥取地学会事務局担当である、ことから両者との連絡調整に適していることに起因する。メンバー主体の運営に近づけるため、まずは運営面での人材発掘および育成が大きな課題であると考えている。

2) 指導体制

メンバーの大多数は化石初心者であり、化石を専門的に扱ったことのある者は発表者を含め3名しかいない。このため、「講師 VS 受講者」という講座形式に成らざるを得ず、活動もその域を超えていない。理想的にはそれぞれが主体性をもち、標本整理はもちろん、調査・研究を行ってもらえれば幸いである。化石部内でのきちんとした指導体制を確立させ、化石部全体の知識・スキルアップを促す必要がある。

3) 鳥取地学会との乖離

化石部メンバーの大多数は、化石部を目当てに鳥取地学会に入会している。もちろんメンバーには鳥取地学会の行事にも参加できる権利があるが、それら行事は専門的で高度な内容が多く、化石部メンバーの足取りは重い。これでは真の意味での鳥取地学会の会員数増加といえず、やがては化石部が独立してしまうのではないかという懸念を抱いている。

これらは結局のところ鳥取地学会が抱える課題の縮小版に過ぎない。しかし、大きく異なるのはメンバーの大部分が「化石初心者」である、ということである。メンバー諸氏が化石への興味関心をより深めていくことで、これらの課題は解決されていくのではないかと信じている（発表者の自己研鑽が必要なことはもちろんである）。

6. おわりに

ここまで、「鳥取地学会化石部」発足までの経緯と、発足後の活動や成果、そして化石部が抱える課題を述べてきた。まだまだ爆発的な盛り上がりは見せておらず、今後もより良い活動に向けて尽力する必要がある。しかし、発表者自身が化石部を通して化石に触れられる時間が増え、また、新たな人脈が構築され、「化石を楽しむ」ことができているのは事実である。これはほかのメンバーも同様である（メンバー諸氏、私信）。鳥取県立博物館と鳥取地学会を繋ぐ化石部。燻る程度かもしれないが、確かに起爆剤になっている。

7. 参考文献

- 星見清晴（2018）鳥取地学会と地学教育．鳥取地学会誌，22，1-4.
公益財団法人日本博物館協会（2020）令和元年度 日本博物館総合調査報告書．355pp.
田邊佳紀・清水道代（印刷中）鳥取県立博物館所蔵目録「鳥取市佐治町辰巳峠産大型植物化石標本群」．鳥取県立博物館研究報告．
山口健二（2019）防災教育と地学教育．鳥取地学会誌，23，1-4.